

今、民主主義を問えば

『民主主義全史』独裁 VS 民主主義(J・キーン、岩木正明訳)

三上治 2022 年 11 月 28 日



(1)

昨年(2021)の8月頃は病院だったのだが、その時は自民党の総裁選挙で真最中だった。候補者たちのパフォーマンスはなかなか面白く自民党の政党の幅の広さを感じさせるものだった。この総裁選はすぐ後に控えていた衆院選挙に対応するためのものであったが、野党は自民党に勝てないだろうということを感じさせるものだった。それを見ながら読んでいたのは『構成的権力』や『野生のアノマリー』という A・ネグリの本だった。またアレントの『全体主義の起源』等だった。なるべく読みにくい本(分かったとか理解したと思えないところがある本)を連れ合いに頼んだのだった。

ただ、ここには民主主義について検討したいという思いがあった。ネグリの『構成的権力』は近代ヨーロッパの民主主義について言及したものであるし、以前にはこれをテキストとする講座を開いたこともあった。そこには僕らは民主

主義にどう対してきたかという反省があった。

今年の二月にはロシアのウクライナ侵攻があって、あらためて、民主主義に対する問いがやってきた。これは幾分か複雑だった。民主主義に対する反対概念である独裁主義を取っているとみられるプーチンも習近平も民主主義を主張するからである。誰しもが分かっている、共通認識に立っているものと思ってきた民主主義であるが、自分で定義し直すことが迫られているのである。

擁護するにせよ、否定するにせよ自分が理解してきた民主主義は曖昧なものではないか、という問いが多くの人々に訪れているのではないか。民主主義というのは国家や共同体の統治の様式のことであり、その普遍的形態として歴史的に登場したものという観念が僕らにあるのだけれど、それが問い直すことを迫られているのだ。民主主義の危機という言葉が誰からも語られるが、背後では民主主義とは何かの問い直しを迫られているのだ。

『民主主義全史』はネグリの『構成的権力』に比べれば分かりやすいが、民主主義とは何かという問いかけに対応してくれる本である。いうなら自問に答えてくれるところがある。また、この本は民主主義を集会民主主義の時代(メソポタミア—ギリシャ)、選挙民主主義の誕生(欧州—大西洋)、牽制民主主義の未来(挑戦を受ける多様な民主主義)というように、歴史的に変化してきた様相でとらえている。特に牽制民主主義論は僕らには立憲主義、あるいは立憲民主主義論とい

えば、分りやすいが、今なぜ、これが出てきたのかを理解する視点を提示してくれているように思えた。最近の立憲主義、立憲民主主義は憲法改正に反対する運動の中から出てきたが、これは戦前に語られた憲法政治（憲政論）とどう違うのか明瞭でなかったが、これは世界的な民主主義の変化の中にあることだと考えれば納得できる。そういうヒントがこの本に散見している。

（２）

民主主義の危機を誰しもが語る。最近の様相について著者は「民主主義をめぐる景色は一変していると述べる。「30 年前までは民主主義の前途は明るく見えた。人民の力は恣意的な支配に対する市民の抵抗が世界を変えた。いま、民主主義者たちが不安定な時代を生きているという感覚にさいなまれながら、劣勢な立場に置かれているのはなぜか」という。

30 年前と言えば冷戦構造が崩壊し、あのフランシス・フクヤマが自由民主主義の勝利を語っていた時期である。スターリン主義的な社会主義が自由民主主義に敗北したことは確かであるが、それは自由民主主義の勝利ではなく、自由や民主主義の中身が問われる時代になったのだと思った。これは当時の僕の認識だったのであるが、フクヤマのいう自由民主主義は社会主義への対抗ということで自由や民主主義が内包していた非民主的で非自由な実態が問われずに済んでいくということが、許されなくなっていく。あたかも安倍元首相らが反共という対抗で統一教会に思想や理念を受け入れていた事態がとわれるように。

社会主義が自由民主主義（資本主義）に対抗するということでその内部に持っていた矛盾がスターリン主義として暴かれたようなことが自由民主主義の内部の矛盾として抱えている矛盾が問われるだろう、ということだ。本当の自由や民主主義とはなにかがとわれるということであった。

冷戦構造の崩壊で自由民主主義の勝利を宣言したアメリカは新自由主義を提起し、ロシアや中国はそれとは違う統治様式を生み出した。それは民主主義とは違う独裁的で権威主義的な統治様式である。社会主義（「プロレタリア独裁による統治」）とは異なりものであり、民主的と称しているが、自由や民主主義とは違う独裁的な統治様式である。アメリカはむかし通りの自由民主主義という概念対抗しているが。その中身への批判も出てきている。

前途が明るく見えた民主主義は今危機的にみえる。それは非民主的な統治権力が台頭し、民主主義の劣勢が、そして内部的には劣化が見えることだろう。それでも自由や民主主義は敗北的事態にあるわけではない。例えば、プーチン（ロシア）のウクライナ戦争での予想外の弱さと敗北的事態はヒットラーのファシズムと違うのであり、その背後には自由や民主主義の浸透がある。それを僕らは読み取ることができるからだ。ファシズムの台頭期と違うものを見て取れるのだ。

（３）

民主主義とは何か、ということに多くの問いかけがあれば、多くの定義もある。それは多様である。民主主義が多様化していくのは必然であるし、希望なのだが、曖昧であることはよくないし、僕らの不安を生み出す。

これに対して著者は民主主義の歴史をふりかえり、民主主義の進化という形で未来を見出そうとする。この方法は妥当だと思える。僕の考えで言えば、今、民主主義は不在であり、空白であり、

未来から視線としてある。その内容は歴史と現実の体制に反抗する運動の中にしかみいだせないと思っている。だから、歴史的な検討は大切なことだ。

民主主義は国家や共同体を統治する様式であり、制度である。そしてそれは自ら(国家や共同体の構成員)の統治ということになる。自らの統治ということ言えばコンミュンとか自治ということが浮かぶが、その対極にあるのは王などの他者の統治、国家や共同体の中で支配層を構成する部分の統治(官僚の統治)ということになる。

この民主主義の祖型は古代ギリシャにあるとされる。著者はこれにメソポタミアや古代シリアをつけ加えるが、この時代の民主主義を集会民主主義と名付ける。古代のギリシャ都市で展開された民主主義は都市(ポリス)の成員が都市のあり方を自由に討議して決めていくものであった。それは共同体の意思が市民の参加と意思によって決められることだ。ただ、市民は共同体構成の一部であって奴隷や女性は排除されているものだった。奴隷制と地域的限定という制約を持つものだったが、人類が経験した最初の自己統治だった。

この時の統治形態、意思決定の方法が集会であり、集会での討議だった。これは直接民主主義と呼ばれるものだった。僕が今、この古代ギリシャの集会民主主義が興味を抱く点は、対応を強いられ、またそれによって滅亡を強いられた戦争との関係である。あるいは軍の統治ということでもいいが、その関係に興味がある。この点は著者と少し興味がちがうが、この古代ギリシャについての評価は妥当なところだと思う。

(4)

近代の民主主義は西欧中心に起こったのであり、イギリスやフランスの王権(アンシャン・レジーム)との闘いであり、王権の廃止を生み出す急進的な行動(革命)を伴うものであり、イギリス、フランス、アメリカなどは革命という概念に包括されるものだった。この革命は古代ギリシャの民主主義の復古として主張された。王権に代表されるような他者統治ということに対して市民による統治が主張された。ルソーのいうように統治主権として主権が現れ、国民の自統治がはじまったのである。アメリカ大統領リンカーンの有名な「人民の、人民よる、人民のための政治」ということが、代表的な理念であると言えよう。

人民による人民のための統治ということは人民主権ということであるが、どのような統治(意思決定)がおこなわれるかということで議会と選挙ということが生み出された。国民の直接的な統治ではなく、選挙で代表を選び、議会での討議によって国家意思を決定していくものである。ここで重要なのはそれが人民の統治であると同時に「討議による統治」ということだった。国民の代表者が「討論によって国家意思を決めていく」という統治形態だということである。これは王、あるいは王の周辺(支配者)による統治と「慣習による統治」の対極にあるものだった。慣習による統治とは権威による統治というので、近代民主制以前の統治形態だった。このことは「議会」が立法権を司るものとして統治の中心にあることに他ならない。

この議会制民主主義は政党政治として現象したのであるが、「全体主義的な統治」(ファシズム)から猛攻をうけた。この点での著者の指摘はおおむね妥当である。「全体主義が恐ろしいのは、

まるで民主主義の上位形態であるかのようにみせかけたことだ」というが、そういう幻想が力を持ったということである。

日本の場合には「国体論」と天皇制が 1930 年代から 40 年代に猛威を振るったことである。これは国体、「天皇の統治」ということが強力に機能したことであり、象徴的にいえば「天皇機関説」攻撃によって、議会主義の理念が簡単につぶされたことである。「天皇制機関説」は議会主義の代名詞だったからだ。僕は天皇機関説の主張だった美濃部達吉が孤立無援の状態であるのを見て日本における民主主義が曖昧なものあったと思った。美濃部達吉や吉野作造の民主主義の曖昧さを思った。

それは戦後民主主義についてもいえることだ。簡単言えば国民主権ということ、国民の自らの統治ということがどこまで理解されていたのか、ということがある。さらに「議論のよる統治」ということ、つまりは慣習（権威）による統治の否定ということがどこまで考えられていたかということだ。特に天皇制の否定ということが（権威による統治）の否定であることがどこまで認識されていたかという点で疑問があった。戦後に美濃部達吉は和辻哲郎などとともに、天皇制と民主主義は矛盾しないと言い出した時に、この疑念が確証的ななった。「天皇の統治」ということが支配力をもったのは「軍の政治」ということが背後にあり、戦争（軍）と民主主義の問題がとわれたのだが、美濃部や和辻などの民主主義（リベラリズム）が曖昧で根底をもっていなかったことをしめす。

振り返れば、議会が慣習による統治、権威による統治をどこまで変えられたといえ、そういう機能を果たせなかったことは疑いない。戦後の日本政治は依然としてそうである。民主主義について左翼はそれがブルジョワ民主主義として階級支配の上部構造であるとしてきた。僕らはこの中で民主主義は未だ未達のものであるが、日本では社会主義革命によって実現していくほかないものと考えた。プロレタリア独裁という社会主義権力の確立が民主主義を実現していくというのは伝統的左翼がそこに民主主義を包括していくことあったが、これは幻想とかいうか、誤りだった。

プロレタリア独裁による統治は実態としてみれば党（官僚）独裁であり、権威に統治（権威と隷属という統治）だったからである。国民の自己統治とか、議論による統治とかはそれ自身の課題（政治的課題－政治革命的課題）として実現するほかないことであり、社会主義の概念にはいないというか、それがむしろ疎外してきたことなのである。レーニンやトロツキーが民主主義や自由を軽視していたといわれるのはそれをしめすといっている。

（５）

著者は戦後の民主主義について牽制民主主義という概念で語る。そこでは 1940 年代の全体主義への反抗にした人たちの見直しがあったという。それは選挙民主主義における「主権を有する人民」という考えを今一度、民主化しようと試みた、という。自己の経験に照らせば、僕は選挙民主主義を初めから信用していなかった。子供のころから選挙をよく見ていたことがある。

多分、それは戦後民主主義に対する不信と言ってよかった。ただ、戦後世代のなかに育っていた現存感覚としての民主制（感覚）は信頼していた。それを統治に結び付けていく、理念も対象も

見いだせなかったにしても。僕は議会外の大衆運動を自由で民主的な感性の表現の場としてきた。

ここには二つの考えがあった。一つはそれが議会主義をこえた統治権力の実現に向かう道だということだった。ただ、この時代に僕らが考えていたのは「プロレタリア独裁」という政治権力（統治権力）の樹立であったが、これは僕らにどのような指示をあたえるものではなかった。統治権力としてそれがどのようなものであるかは一度も明らかにならないものだった。上で指摘したようにその実態が分かってきたものである。

それに対してもう一つは権力の横暴というか、動きをチェックして行くものだった。ただ、これには理念を与えることができなかったにしても権力の暴走をとめるという考えは強くあった。権力の暴走や横暴をチェック抑制していくものと大衆運動問い考えでであった。全共闘運動等が直接民主主義や自治を主張していたことは根本ではこういう考えがあった。というのはどれだけ急進的な展開も、政治体制の変革には届かないという現実意識（認識）があったからだ。

著者は権力の動きをチェックしていくことを付与された民主主義のことを牽制的民主主義というが、これは統治概念としての民主主義から、統治権力のチェックという所に軸を移した考えであるが、その多様な展開の中に民主主義も未来をみいだしているといえる。牽制民主主義を民主主義は傲慢で暴力的で利己的な命令から解放された多様な生き方を尊重してくれる普遍的な理想であるとし、多様性の擁護と権力者の説明責任を要求する制度と考えている。そして、民主主義考える上で最も重要な問題は権力の乱用と考え、民主主義を、権力を抑制するための終わりなき過程とすることとして提起する。ネグリは民主主義を絶対的手続きというが、これは権力を抑制する手続きであり、権威による支配と対抗し続けることでもある。この指摘はアナキズムと民主主義を結び付ける考えとして鶴見俊輔がやっていた主張を想起させる。いずれにしても今、民主主義を考える上でヒントになるものが随所にある本である。